

Title	ラッチエル海洋論(市川誠一譯, 古今書院發行)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Arigo, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.169- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0170">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0170</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

學の題下に、エジプト學、アッシリア學、ヘブライ文獻學、聖書解釋、パレスチナ考古學、セム金石學、アラメア研究、エチオピア研究、イスラム研究、古代イラン研究、インド學、支那學等について敘述されてゐる。

廣汎な東洋學を僅か五十頁の中に壓縮された氏の手腕には敬服に値するものがある。フランス在住數箇年に及んだ氏は與へられた頁數の少きを嘆ぜられたことであらう。

要するに本書は、我が學壇にフランス科學の優越性を適當に認めしめんとするフランス學會の目的を充分果したものとはいへやう。(宮島貞亮)

## ラツチエル海洋論

(市川誠一譯  
古今書院發行)

ワシントン會議の事業が繼續されて、此の度ロンドン會議に依つて、新たに海軍々備制限に關する協定が成立したが、これを機縁として海に對する關心の増長したことは、恐らく世界を通じての事實であらう。併してその傾向は我が日本に於て殊に著しきものであるやに感ぜられる。此の時機に當つて、海洋それ自體の政治經濟上の意義を知らしむべく本書の公にせられたことは時の最も宜しきを得たるものである。原書は題して「諸國民發展の原泉として海」といひ、海上支配の地理學的根據を明かにする爲に一九〇〇年に、その第一版が上梓せられたものである。吾人が疑問とする海洋の諸問題に對して、本書は多くの例證を東西古今の史實に

求めて、端的に明確なる解答を與へたるのみならず、又海洋の地理的考察に對する幾多の深い暗示を提出してゐる。羅馬の世界的覇權の空前にして比類なき組織は、地中海に依る海上聯絡の卓越即ち海洋の統一性に裨益せられたるに依るのである。海岸はその長きを以て尊しむるは謬見である。必要以上の海岸を有することは防衛上の勢力消耗である。陸地の境界に於ては隣接國のみが脅威であるが、海岸は凡ゆる國の勢力に對して解放されてゐる。ヴェニスとリユーベツクの勢威は住昔のシドン或はアテネの勢威の如く、唯一の狭い入江から漠々たる海上を風靡したのである。海は最大なる自然であるが、それは能動的なる勢力の源泉に非ずして、單に通路を提供するものに過ぎない。即ち勢力の源泉は常に陸地である。單に通商國に過ぎなかつたフェニキヤは、新進の諸商業國の競争に敢なく潰えた。これに反し陸地と住民を征服し、自國の領地を堡壘で覆ふたカルタゴの勢力が如何に強大であつたかは、羅馬との戰爭に於て知ることが出来る。又海洋的方面と大陸的方面を有してゐる國に於ては、その重點の移動が重要な意義を有することは、佛蘭西のメキシコに勢力を得んとする企圖に依つて伊太利及び獨逸の統一を容易ならしめた事實に徴して明白である。本書に於て、斯の如き幾多の大洋及び大陸の關係が卓見を以て直截に解説せられてゐる。僅々百五十頁の小著ではあるが、これを熟讀玩味すれば、一言一句興味は津々として盡きざるものあり、よく難解の内容を懇切に譯出せられたる市川氏並に校閱者岡崎教授に深甚なる敬意を表するものである。(有賀春雄)